

伝クセノフォン『アテナイ人の国制』の成立年代

仲手川 良雄

【要約】この作品の成立年代については、十九世紀中葉以後多数の学者によって多くの説が主張されてきた。その結果年代推定の手掛りとなる記事はすでに作品のなからすべて取出され、新たに見出される余地はないようにみえる。しかも今日においても成立年代について定説が確立されたといえる状態にはない。ところで従来の研究では、年代推定の手掛りとなる記事その他は指摘しても、それを手掛りとして選んだ理由の説明は不足であった。それが年代推定を不確定にし、諸説を生むことにもなった。この研究状況において年代推定の決め手は、説得的かつ充分な理由づけにあるといえよう。

まず推定の基本的留意事項を掲げ、ついで多数の学者がその間に年代を推定している紀元前四三一—二四年の間に収まる説を中期説とし、この間以後とみる後期説、この間以前とみる前期説を批判した後、中期説の有利さを論証する。さらに中期説のなかでも四二五—四年説が正しいとしてその諸理由を詳細にのべたあと、四三一—三〇年説を批判して、結論的考察を行なう。

史林 七四卷二号 一九九二年三月

はじめに

この小冊子、伝クセノフォン『アテナイ人の国制』（以下『国制』と略記）については、多くの「謎」^①が付きまといっている。これを誰が、いつ、どこで、どんな目的で、誰を対象として、どんな形式で書いたか明らかでなく、これまで多くの研究がなされてきたが、これらのいずれについてもいまだ定説が確立されたといえる状態にはない。著者の根本思想および記述の少なからざる箇所についても、同様に分明でないところがあり、これらについては可能な限り考究の必要があ

るが、この小冊子を歴史的にみようとするとする者にとつては先に挙げた諸疑問のなかで、いつ書かれたのかについては、どうしても自分の見方をもたないですますわけにはゆかない。なぜならたとえば、アテナイが外敵に領土を荒らされているという記事 (Ps. Xen. *Anth. pol.* 2. 14, 16. 以下この作品については著者名と書名を省略して章、節のみ記すことにする) をペロポネソス戦争中のことをいっているとみるか、紀元前四四〇年代 (以下紀元前は省略) のことをいっているとみるかが決まらないとき、歴史的解釈は文献学的解釈よりもいっそう決定的な欠陥をもつことになるからである。

成立時期については十九世紀以来研究が積まれており、すでに諸家の研究によってそれを推定させる手掛りは記述のなから一つ残らず取出され、それらについての論議はすっかり出尽してもはや新たに推定し、説をなす余地は残されていないかみえる。たしかに成立時期を推定させる新たな手掛りを記述のなかに発見することは、今日では難しいであろう。いやむしろ一見既知の手掛りについての新しい理由すら付け加える余地はないかみえる。もしそうならば、われわれは成立時期について論ずることは止めて、ただ誰だれの説に従う、あるいは誰だれの論じた理由にもとづいてこれこれの手掛りが年代推定の根拠たりうると思うとだけいえばよいし、またそうすべきものであろう。たしかにこの問題ではもう新たな手掛りとなる記事を見出す可能性はほとんどあるまい。しかしなぜある記事を年代推定の手掛りとして選んだかの理由についてはまったく別である。従来この理由づけの研究はけっして充分であったとはいえない。理由づけが不足であるということはその手掛りそのものが周到な考慮によって選ばれていない可能性があるということに通じ、したがってまた諸研究者によってつぎつぎと別の手掛りがとりだされて、多様な成立年代が主張される結果をうむ。こうしてみると、少なくとも手掛りがほとんど取り出されてしまった今日の研究状況では、説得的な理由づけの提示こそ成立年代推定の決手であるといっても過言ではない。ところでこれから以上のことを念頭において考察を進めるとして、まず成立時期推定の基本的留意事項をつぎに掲げておこう。

一 まずこの作品の記述の一部だけに焦点を当てて、それについての解釈からただちに成立時期を推定することは避け

るべきである。全体を精査し、その推定根拠と相容れないかに見える記述を周到に検討して斥けることができたときに、はじめて一つの説が主張されうる。

一 年代推定の決め手となるのは事件であって思想傾向や文体的特徴ではなく、これらは補助的あるいは補充的のみに考慮されるべきである。^④

なお、記述が過去のことをのべているのか、現在のことをいっているのか、あるいは仮定のことを語っているのか、さらにはまたたんに一般的事実としてあるいは箴言としていっているのか、事実的経験にもとづいて書いているのか、それとも具体的事実そのものを記しているのか、慎重に判別する必要がある。

ここに挙げた諸事項は常識的なことで、それじたい異論の余地はないかに思われるが、これらを諸説にあてはめてみると、信頼性を失う説は意外に多い。

さて『国制』の成立年代については、四五〇年ごろからペロポネソス戦争末期まで、さらには四世紀の海上同盟の時期まで諸研究者によって多様に推定されているが、このうち、四三二—二四年の間に推定する人びとが相対的に多いと思われる。したがってこの間に推定時期をおく説をかりに中期説とし、それ以前とする説を早期説、それ以後とする説を後期説と呼んで一応分類してみよう。

- ① 直接「離」に語を掲げべきを解するにすぎぬ。W. Nestle, "Zum Rätsel der *AGHNAION POLITIA*", *Hermes* 78, 1943, 232-244; C. Leduc, *La constitution d'Athènes attribuée à Xenophon*, Paris 1976, 29ff.
- ② 『国制』を主題として、きまに今世紀に書かれた著書に主題を論文のうち、注①に挙げたものの外、本論文作成の参考としたものを掲げ、ついで G. W. Bowersock, "Pseudo-Xenophon", *HSPH* 71, 1966, 33-55; M. J. Fontana, *L'Attenation Politia del V secolo A.C.*
- Palermo 1968; W. G. Forrest, "The Date of the Pseudo-Xenophontic Athenian Politia", *Klio* 52, 1970, 107-16; H. Frisch, *The Constitution of the Athenians*, New York 1976; A. Fuetsch, "The 'Old Oligarch'", *Scripfa Heterosylmitana* I, 1954, 21-35; K. I. Gelzer, *Die Schrift vom Staate der Athener*, *Hermes-ES* Heft 3, 1937; A. W. Gomme, "The Old Oligarch", *HSPH* Suppl. 1, 1940, 211-45; H. U. Instinsky, *Die Abfassungszeit der Schrift vom Staate der Athener*, Dissertation Freiburg i. B. Freiburg

i. Sa. 1933; E. Kalinka, "Prolegomena zur pseudoxenophonischen *ÄHNHAION POITTEIA*", *WS* 18, 1896, 27-83; Ders, *Die pseudoxenophonische ÄHNHAION POITTEIA*, Leipzig 1913; A. Kirchhoff, "Über die Schritte vom Staate der Athener", *Philol. u. hist. Abhandlungen d. Kön. Akademie d. Wiss. zu Berlin* 1874, 1-51; Ders., "Über die Abfassungszeit der Schrift vom Staate der Athener", *ibid.* 1878, 1-25; M. Kupferschmid, *Zur Erklärung der pseudoxenophonischen ÄHNHAION POITTEIA*, Dissertation Hanburg 1932; J. M. Moore, *Aristotle and Xenophon on Democracy and Oligarchy*, California 1975; H. Müller-Stürbing, "*Ägyptotopokratæ*. Die attische Schrift vom Staat der Athener", *Philologus* Suppl. 4, 1884, 1-188; J. de Romilly, "Le Pseudo-Xenophon et Thucydide", *RFPh* 36, 1962, 225-41; E. Rupprecht, "Die Schrift vom Staate der Athener", *Klio* Beiheft 44, 1939, 1-176; G. Stail, *Über die pseudoxenophonische ÄHNHAION POITTEIA*, Dissertation Würzburg 1920; M. Treu "Ps-Xenophon *Topokratæ*" *Abhandl.*

(一) 後 期 説

後期説には四一三年前後に成立したという説が多いが、これに対して四一〇—〇六年説をとるフォンターナはもっともおそくとなっている方とみられる。^①かれはその根拠として民主的国制は変えられないという、3・9の記事を重視する。これはオリガルキア復活の可能性が絶対でないことを示す証言であるとして、この作品は四一一年のオリガルク政権崩壊後の状況のなかで書かれたものと考ええる。かれが著者をクセノフォンとみるのも時期をおそくとする理由の一つである。ともかくかれは四一三年の大シチリア遠征敗北以前の状態を示すとみられるアテナイ海上帝国の隆盛とその諸利点についての

vetus", *RE* 2: 18, 1967, 1928-82; 村田敷之亮「傳クセノホンノアテナイ人の國家」『史林』第十六卷(一九三二年)第三、四号。其下英信「伝クセノホン作『アテナイ人の國制』の訳語前編」『史學』(三田史學會)第五十一卷(一九八一年)一、二号一七七一—〇七頁。また第五十二卷(一九八二年)一、二号七一—一一頁。同「伝クセノホン作『アテナイ人の國制』の制作年代について」『西洋古典學研究』30(一九八二年)三二—四三頁。注①および本注にあげた文献は以下著者の姓のみ記す。同一著者で複数の文献がある場合は著作年か書名の略記を付記する。

- ③ 成立年代についての研究はほゞ一五〇年来なごなわられてゐる。それについての一九世紀の研究は cf. Kalinka 1913, 5-17; Treu, 1947-59.
- ④ 成立年代についての諸見解の多数が四二四年から遡つては四一〇年以内に収まっている以上、文体や語法から年代を推定するのは難しい。人が一度確立した文体は時代の文体傾向が變つても保たれることが多くからであり、文体からの推定は「印象批評」(Leduc, 34)になる怖れがある。

諸記事(とくに2・2—8, 11—13)や、四一四／三年までアテナイで納入され(以後は二〇分の一税に代えられ)た年賦金についての記事(2・1, 3・2)を決定的なものとみない^④。

ところでこの小冊子に現われた諸思想を四一年のオリガルク政権との関連でみようとすると傾向は、後期説の他のものにも認められる。フクスは四二九／八年—四一三年の間としつつも、この下限に近い方により多くの可能性を認めている。その理由は「革命的オリガルク」である著者と穏健派オリガルクであるテラメネスたちとの対立をはじめ、四一年にみられるような諸政治党派の見解がここに認められるから、ということである^⑤。しかしこの作品の著者を革命的オリガルクとする見方は、著者が過激なオリガルクの主張にしばしば反論しているとみられることから問題で、強引な解釈が目立つように思われる。また四一五／四年を主張するマッティングリーの論拠も、大シチリア遠征への言及と考える記事(2・15)があること、および濟神行為についての記事(3・5)は遠征直前におけるヘルメス石柱像破損・密儀冒瀆の事件を思わせることの二点である^⑥。しかし手掛りとされたこの両記事じたい曖昧あるいは抽象的に表現されており、かれのいう具体的事件と結びつけることが難しい上、他の手掛りをすべて無視している。後期説は一般に確たる根拠に立っているようには思えない^⑦。

① Fontana, p. 50.

② *ibid.*, 69.

③ *ibid.*, 84.

④ cf. *ibid.*, 31.

⑤ Fuchs, 35 n. 37. 類似の見解はマッティナー・シットリックによつて見られる(Müller-Stähling, 66)。

⑥ フクスが著者をオリガルク革命の推進者とする(Fuchs, 22, 26, 28, 33)理由は、作品2・15で非島国の短所として「われわれの敵に望みをかけて反乱をおこし、陸路で敵を導き入れようとするだろう」と

いう言を、著者「老オリガルク」自身の革命計画とも(*ibid.*, 28, 29 n. 17)。また1・9の「各望市民は賤民どもを罰し」を「革命成功後の老オリガルクの報復計画とする(*ibid.*, 35)など、受容しがたい解釈なども見られる。

⑦ H. B. Mattingly, "The Athenian Coinage Decree", *Historia* 10, 1961, 179.

⑧ 後期説ではほかにアルキビデネスを著者と推定するW. Helbigが四一五—三年の作と主張している(cf. Frisch 104)。

(二) 早期 説

バウアーサックは早期説のなかでも、成立時期を四四五―四四一年とみて最早期の一つを主張している。^①かれは早期説が主流になってきたという傾向を捉えてその線上に自説を打出しているように思われる。かれの挙げるおもな理由は、かつてアテナイが外国のオリガルク諸勢力を支援したとき、その国の民衆あるいはアテナイの民衆派に不利益を与える結果になったという^②3・11の記述である。3・11にはポイオティア、ミレトス、メッセニアという固有名詞が現われており、こゝはこの小冊子のなかで具体的事件に触れられている唯一の部分である。バウアーサックは著者「老オリガルク」がこれらの事件の印象のもとにこの節を記述したとみて、メッセニアとミレトスの事件がおこった年代を考慮しつつ、四四六年という上限をひきだす。しかもかれはこれらの三事件に触れて、同じようにオリガルキアの黙認の結果生じたサモス反乱に触れていないという理由で、四四一年を下限とみる。この推定の上限は具体的事件に依拠している点で一定の説得力をもつが、下限は言及の欠如という消極的理由しかもたない。しかもサモス反乱と言及された三事件とを同列に置くことは疑問がある。^③もう一つバウアーサックが重視するのは敵がアテナイの領土に侵入して荒らしても、民衆は「恐れをいだくことなく暮して」いるという^④2・14の記事であり、ペロポネソス戦争中ではそれは不可能であったという。しかし3・11を除いて他の記述をほとんどすべて一般的抽象的とし、成立時期推定の根拠たりえないとして斥けながら、この一句だけを実際の記述とみて戦前の証拠とするのは公正ではない。かれの説も全体の精査に欠けているといわざるをえない。^⑤

同じく早期説のホールは1・1、3・1でいわれている「アテナイ人の国制」という語を、無制限の直接的デモクラシーと解し、これが内政面で確立されたのを四四三年のメレシアスのトゥキュディデスの追放にみる。^⑥かれはこの作品の成立時期を四四六―五―四三一年の平和の時代に書かれたと長くとるが、ペロポネソス戦争に入る以前とみるおもな理由は、もしその後であれば、作品の記事のなかにペリクレスの強大な権力が反映されている筈だが、それが認められないという、

かなり漠然とした理由にもとづいている。四四〇／三九一年ごろとみるヤコービの理由も具体的でなく、四三二年以前とするフリシュの論拠は主要な点でインスティンスキーに依拠している。パウアーサックを別として、早期説は一般にインスティンスキーの著作に触発されて始まり、またそれにおもな論拠を依存している場合が多い。ただ文体論からする早期説は別で、ダヴェリオ・ロッキはその用語の古さからみて四五〇―四〇年とみる^⑦。これほど早期でなくても、アッティカ散文に大きな影響を及ぼしたゴルギアスの「葬送演説」（四二七年）以前の作とする見方は強い^⑧。またロミリーはこの作品とトゥキデデスとを比較しつつ論じているが、早期説に立っているとみられている^⑨。

早期説のなかで慎重に検討しなければならないのはインスティンスキーの著作である。かれの論証はかなり綿密であり、成立時期をペロポネソス戦争中とする論者にとってはもともと手強い相手である。しかしかれはそれまで支配的であった四三一―二四年説にたいする批判においては、無視できない諸見解を示しているが、自説の基礎づけにおいては一転して手薄になっているように思える。これから中期説についてのべるとき、それへの批判としてインスティンスキー説を随時紹介し、検討することにした。中期説も成立時期を四三一年ごろにおく説と四二四年ごろにおく説とに大別されるが、まず中期説を他と分ける共通の論拠からみてゆきたい。

① Bowersock, 38.

② *ibid.*, 35 ff.

③ 3・11の三事件のうちその歴史的過程がサモス反乱にもっとも近いのはミレトス反乱だが、二つの間にもつぎのような相違がある。まずオリガルキアの黙認ということについて、アテナイ支配下の諸国にはオリガルキア等非民主政のポリスは少なくなかったが、旧来の政体の維持は年賦金を払っている限り、一般に許容されていたとみられる。

この点サモスは同盟加入時からオリガルキアであった（*Att. I. 3, 151*）が、ミレトスは反乱後アテナイによってオリガルキアの国制が

四五〇／四九一年に許容されている。これは、エリネトライ、コロフォン、カルキスなどその前後に反乱をおこしたポリスには民主政が導入されていることと比較して、格別の措置とみられ、ミレトスは「支援した」といわれる余地がある。サモスとは同じでない。またサモス内乱はその実状を見ると、当初アテナイによる民主派支持の干渉があった（*Thuc. I. 115, 3*）ので、パウアーサックがいうようにオリガルクを支援した過去の三事件の部類に入るものではなく、むしろ「現在」の民主派擁護の政策に近いのではあるまいか。

④ パウアーサックにたいする批判として、cf. W. R. Connor, *The*

New Politicians of the Fifth-Century Athens, Princeton 1971, 208f.

⑤ E. Hohl, "Zeit und Zweck der pseudoxenophontischen ATHE-
NAION POLITEIA", *CPA* 45, 1950, 31.

⑥ *Athns*, 211, 292.

⑦ *Leduc*, 33.

⑧ *Loc. cit.* ノーウツツの文体論から年代推定をしよう (G. Norwood,

"The Earliest Prose Work of Athens", *CJ* 25, 1929/30, 379f.)⁹
真に「制作年代」四一頁以下も文体からの年代推定を感ずよう。

⑨ Romilly, 225-41. Cf. *Leduc*, 32f.

(三) 中 期 説——その共通論拠——

『国制』がアルキダモス戦争中に書かれたとする主張にとつて、アテナイの国土が敵によって荒らされているとする2・14、16の記事は重要な論拠になっている。2・14—16の三節はいずれも、かりに「島に住んでいれば」という条件を仮定する非現実の記述と「現状では」(εἰς) という語に始まる現実的記述とが対比されており、とくに2・14、16では後者に直接法現在形が用いられている。この εἰς 以下を現在の現実の記述とみるか、時間には関係のない論理的言表とみるかによって、成立時期についての判断が違ってくる。キルヒホフ、カリンカ以来現実の記述と解されてきたが、インスティーンスキーは論理的性格の記述とし、フリシユもおおむねこれに従っている。しかしゲルツァーやトロイはインスティーンスキーを批判して、ふたたび現実説を主張している。この両者、とくにトロイの言語学的解釈によってインスティーンスキーの主張は覆されたように思えるが、さらにつきのような現実的理由を加えることができる。

インスティーンスキーは「自国の制海権を信頼してこれらの財産を島じまに託し、アッチカの地が荒らされるのは見過す」という2・16の記事を、ペロポネソス戦争中の事実の記述ではなく、ペルシア戦争のとき見出され、確認された原則の表明とみる。かれによれば、四五〇年代における長城壁建設はこの原則への忠実さを示す事件にほかならない。これに対しては、ペルシア戦争のときは自国の制海権への信頼なぞありはせず、絶望的な気持で海戦に賭けたのだというゲルツァーの指摘がある。またペルシア戦争のときは財産よりも、まず海戦に不要な人びとをおもにトロイセンに避難させたのだ

(Hdt. 8. 41. 1)とこれに付け加えることもできよう。しかしともあれ、インスティンスキーの「原則」説にとってもっと根本的難点は「財産を島じまに託す」という点にある。アテナイ人がともかく財産を本国から他地へ移したのは、ペルシア戦争のとき以外アルキダモス戦争に入るまではなかったことである。⑧もしもインスティンスキーのいう原則がペルシア戦争以来確立されたものであるならば、四四六年のブレリストアナックスによるアッティカ侵入・耕地破壊 (Thuc. 1. 114. 2)の際にも島じまに財産を移そうとする動きがあってもよかつたろうが、それはまったくなかつたようである。⑨ともかくアテナイ人が家畜類をおもにトロイゼンではなく、島じまに移したのは、アルキダモス戦争下ペリクレス戦略に基づき、かれの言に半ば強制されたのが最初である (Thuc. 2. 14)。つまり財産を島じまに移して籠城するということが、インスティンスキーのいうように、かりに現実の記述ではなく原則の表明であるとしても、この原則はペルシア戦争以来ではなく、アルキダモス戦争以後確立された原則とみなされるべきである。⑩

さてもし以上の推論が正しく、外敵の侵入と耕地破壊が当時の事実の記述であるとすれば、それがおこなわれた時期 (四三二—二五年、および四一三年以後を含まないルデュクとゴノムの年代推定は斥けられることになろう。ルデュクはこれまでの年代推定が事件を偏重していることに不満を表明して、全体の思想的考察から年代を決めてゆこうとする。⑪この作品には陽気な勝利の雰囲気とアテナイ帝国主義への賛美とが認められるとし、この思想的状況をもっともよく示しているものはエウリピデスの『ヒケティデス』と『イオン』であるという。かれはこのような思想的雰囲気の類似から、この両作品が上演されたニキアスの平和の時期 (四二二—一八年) を『国制』の成立時期と主張する。ゴノムはいっそう慎重だが、四二〇—一五年の間に最大の可能性を認めている。⑫

インスティンスキーは海上帝国にたいする従属国の反抗「不可能性」を扱った 2・2、3 の記述を成立時期推定の有力な根拠の一つにしている。⑬かれは 2・2 を「大陸の強国の従属者たち」(τοὺς κατὰ τῆν ἀστυμίαν) は「小さなポリスを結集して」(ἐκ μικρῶν πόλεων συνουκισθέντας) 一団となつて戦つことができ、他方へ海の強国の従属者たち」(τοὺς κατὰ θάλασσαν

αἰῶνος ἀποκομιδῆς)は島国である以上、諸ポリスを一か所に集合させることはできない^⑩(傍点引用者)と読み、ここでまず反抗の形式としての集結がとくに強調されていることに注意を喚起する。その上で、海の強国に対してその従属国が集結できないというこの「原則」は、カルキディケ諸市がオリュントスに集結してアテナイに反抗した事実(Thuc. 1. 58. 2)によって破られたとし、この記述と事実との矛盾から、この作品は四三二年以前に書かれた筈だと推定する^⑪。しかしこの場合インスティンスキーは「島国である以上」(ὅσοι νηπιόεσσι)という文を事実上まったく無視している。テキストは島国であるゆえに集合できないと明言しているので、大陸に属するカルキディケ諸市には先の記述はあてはまらない筈である。にもかかわらずインスティンスキーが大陸諸国と島国とを同一視するのは、2・3の「大陸においてアテナイの支配下にあるポリスのうち、大きなポリスは恐怖のために、小さなポリスは必要から、アテナイに服している」という記述によって、大陸諸国も集結してアテナイに反抗できないと読むためである^⑫。しかし2・3では集結にはまったく触れられておらず、したがってインスティンスキーの説はテキストから遊離した恣意的解釈というほかない。2・3の趣旨は、2・2によって島のポリスが集合して反抗できないためアテナイ海上帝国に従うのは理解できるが、大陸のポリスがそれに従わなければならないのはなぜかという疑問にたいする答と思われる。したがってこれは大陸のポリスの服従の根拠をのべたものであって、反抗の可能性を完全に否定しているわけではない^⑬、反乱が集結しておこなわれることを前提しているわけでもない。反乱した大陸のポリスは海からの輸出入を閉ざされても、陸上補給に期待することは可能な筈である。このように考えれば、ポテイダイアの反乱とオリュントスへの集結の後にこの記事が書かれたとみても、格別に不自然はない。

『国制』の諸記述とトゥキュディデスに記されたペリクレスの戦略との間にはしばしば類似性が指摘されている^⑭。しかし海軍に重点をおくアテナイの基本戦略にはペルシア戦争以来一定の連続性があり、またペリクレスは開戦前から將軍としてアテナイを指導していたので、この作品に記されている戦略がはたしてペロポネソス戦争におけるペリクレスの戦略と符合するのか、それともそれ以前からあるアテナイの伝統的戦略を受けただけなのか判定するのは容易ではない。

しかしもしこれが区別できれば、『国制』が戦争中の作であるか否かをきめる重要な根拠たりうるであろう。まずペリクレス戦略の主要特徴を列挙してみよう。^②

(1) まずアテナイは海軍国として海上の覇者たる地位を堅持する。この基本戦略を貫徹するためには軍資金が必要であり、その主要源泉である年賦金を確保するために同盟国を統制しておかねばならない。それにはまた海軍要員の高度の技術と必要な数の要員の確保とが欠かせない。(2) アテナイ陸軍は城壁を固め、強力な侵入軍にたいしては打って出ない。市民は必要な家財をもって原則として城壁内に集まり住み、家畜類は島へ移す。耕地は敵の荒らすに任せる。(3) 艦隊を出撃させて敵地を荒らす。^②(4) 戦争継続中は支配圏の拡大を望まない。

ここに挙げたもののうち、(4)以外はおおむねこの作品に記されている。(4)についても支配地を広げることを望んだり、勧めたりする記述はないので、ペリクレス戦略に反していないといえよう。^②ところで前掲の諸方針のうち、開戦後のみに関わること、あるいは開戦後とくに強化されたことが『国制』にも記されてあれば、年代判定の根拠あるいは参考となる。開戦後に関わることの第一は、すでにのべたように財産を島じまに移すことである。第二は地方居住市民の城壁内への移住である。『国制』のなかには移住がなされたことを明言している記述はない。しかし2・16の「自国の制海権を信頼してかれらの財産を島じまに託し、アッティカの地が荒らされるのは見過ごす」という記事に注意する必要がある。

「財産を島じまに託す」ことを個人的にできる市民は数が限られており、これは国家的方針に基づいておこなわれねば実行困難なことである。インスティンスキーはブレイストアナックスの侵入のときも、エレウシス平野の農民は動産をもってサラミスに逃れたらうとしているが、この不意を衝いた急襲に面して、どうしてそんな時間的余裕があったと考えられるのであろうか。この場合侵入者はエレウシスからトリアまでの耕地を荒らして引き上げたが、そこで引返すとはアテナイ側の誰にも前もって知りえなかつたらう。周辺の住民は広く脅威に晒された筈である。エレウシスはアテナイ第三位の平野でアッティカとしては肥沃な地であり、^②人口も少なくなかったと思われる。この辺の住民だけでも島に避難すると

すれば、これは大事業で、かなりの日数を要したに違いない。しかも一日か二日で領土を横断されてしまうような狭い国では、敵が侵入すれば国土のどこでもが危険区域になる。刻々と迫ってくる敵を前にして大多数の市民の財産を鳥じまに移すことは、どうみても不可能である。スパルタを相手に籠城作戦を貫徹しようとすれば、ペリクレスの指導によってしたように、あるいはかつてクセルクセスの侵寇のときそれに備えてしたように、あらかじめ、全市民の財産の移送を国家指導下に計画的かつ全体的に完了しておかなければならない。しかもこのようにして財産を移してしまった市民の本拠地は当然のことながら、この場合城壁内に移すほかないのである。またこのようにしてはじめて「アッティカの地が荒らされるのを見過ごす」ことができるのも、またいうをまたない。つまり先に引いた2・16の記事は原則として、全市民の城壁内居住を前提しており、これは四三一年の開戦以前にはなかったことである。

第三に艦隊で出撃して敵地を荒らすことであり、これはペロポネソス戦争以来組織的継続的になる。それ以前にも四五六／五年にトルミデスがペロポネソス沿岸に、また四五四／三年ごろペリクレスがシキュオンとオイニアダイに、それぞれ艦隊攻撃をかけている。しかしこの両遠征の目標は軍事的である。敵軍に損害をあたえ、敵側のポリスを奪取しているが、耕地破壊はおそらくおこなっていなかったのではないかと思われる。敵の耕地破壊という経済的効果を狙う戦術が方針としても、実戦においても、艦隊による遠征の主目的にされるようになったのはペロポネソス戦争以後である。この点からみて、「海の支配者は自国よりも強い国の領土を荒らすことができる」(2・4)と耕地破壊を主目的にしているこの作品の記述は、ペロポネソス戦争開始後の状況に適合している。

第四に敵地に船を乗りつけて砦を築くというペリクレス戦略と、岬、沖合の島、海峡に船をつけて住民を苦しめるという2・13の記述との関係で、これはいっそう重要だが、この点についての考察は後に譲ることにしたい。

以上によってこの作品がペロポネソス戦争以前ではなく、その戦争中の作であることはほぼ立証されたと思われる。こうして早期説は斥けられたが、他方後期説も成立しがたいことはすでにみた通りである。そこでアテナイの耕地が外敵の

侵入によって荒らされるという記事を現状の記述として、それがおこなわれている間に書かれたとみれば、すでに四一三年以後における侵入の場合は斥けられているので、開戦とともにペロポネソス軍の侵入がおこなわれた四三一年から、その侵入と耕地破壊がおこなわれなくなった四二五／四年までの間に成立したことになる。すでにのべたように、この期間では大別して四三一年に近い時期をとる説と四二四年に近い時期をとる説とがあって対立している。ところでこの七年のうち四三〇年半ばから四二八年半ばまでの二年間、および四二七年末から四二六年末までの一年間、アテナイは疫病に襲われており、この間に挟まれた短い時期も含めて、四三〇年半ばから四二六年末まではどちらかといえば苦難の時期であり、この作品に表われているような海上帝国の贅美と軍事的優勢の気分とは遠かったと思われる。とすれば、開戦から一年ないし一年半の間か、あるいはアテナイが軍事的優勢を確保した四二五年夏から約一年間かが成立時期として有力になってくる。そこでこの二つの時期に絞って考察するとして、これらの間には類似と相違とがある。

両時期を特徴づける共通の諸事象についてはこれまでのべてきたが、相違点としては二つの時期が疫病の前と後とにあること、その前期の指導者はペリクレスであり、後期の有力な指導者はクレオンであること、後期には痛烈な政治的喜劇の作者アリストファネスとエウポリスの活動があることその他であるが、さらに注目すべきは前期と後期とでアテナイの戦略に変化がみられることである。結論的に筆者は後期の方を支持するが、まずその諸理由を説明した後に、前期をとる説の根拠を批判的に考察することにした。

- ① Kirchoff 1878, 10; Kalkka 1913, 225.
- ② Instinsky, 10.
- ③ Frisch, 58. Νύνηται “*are ei eidōs tri odōu tou agōu eint-pñrouou odōs rephōou*” (2. 14) と同じ文における未来形に注目し、2・14の記述は現実の報告であるよりも理論の提示であるとす。
- ④ Gelzer, 63, 69 f.; Treu, 1952 ff.; Ders. “*Elne Art von Choregie in peistratischer Zeit*”, *Historia* 7, 1958, 391 Anm. 2.
- ⑤ Instinsky, 14.
- ⑥ Gelzer, 69 f.
- ⑦ ヘルシニア戦争のとき財産を移したことが（ロドトスには記されていないが）トゥキキディデス (1. 89. 3) が記している。
- ⑧ インスティンスキーはこのときも財陸を島にまに移したと推定して（Instinsky, 14）。これについては八三頁以下参照。
- ⑨ アテナイは四五七年にタナグラで総力を挙げてペロポネソス同盟

軍と戦い、惜敗した (Thuc. 1. 107, 5-108, 1)。したがって少なくともこの時点では範城の原則は確立されつつあったわけである。

- ⑩ Leduc, 35.
- ⑪ Leduc, 198 ff. このあたりに成立時期を平和の期間とする見方に対しては、e.g. 以下評議会の審議事項として最初に挙げられている「戦争ごころづい」(αρετή του πολέμου) という句が定冠詞でなく、かつ「戦争ごころづい」(αρετή πολέμου κατά εὐφυγίας) ともなっている点(戦争中を先手をとるべきこと (Kirchhoff 1878, 8))。キルホフの説に賛成する⑬、Kalinka 1913, 5; Gelzer, 62, 64 ff. 賛成に近い⑭、Miller-Stübing, 47; Treu, 1956. このとき、ロネネン戦争の現実と結びつけながら、Insinsky, 31. この説に近いのは、Hohl, *op. cit.*, 28; Frisch, 52-4.
- ⑫ Gomme, 245.
- ⑬ Insinsky, 19-21, 33.
- ⑭ この「大陸の強國の従属者たむけ」「海の強國の従属者たむけ」という訳をするのは、インクマンスキーのほか、Frisch, 23; Kalinka, 73. 筆者は「陸上への支配をわけていゝ人びと」「海上への支配をわけていゝ人びと」という訳をする。同様の訳は、H. Schneider, *Staatsform und Politik*, Leipzig 1932, 101 Ann. 1; Moore, 41; Bowersock, 489; Leduc, 19, 以下多読。後者のようにとれば、インクマンスキーの解釈は、このよう成立した。
- ⑮ Insinsky, 21.
- ⑯ *ibid.*, 20.
- ⑰ cf. Gelzer, 70 f.
- ⑱ Thuc. 1. 142-4, 2. 13, 2; cf. Thuc. 2. 62, 1-3, 2. 65, 11.
- ⑲ たぶん、Kalinka 1913, 233; Frisch, 79-87; Nestle, 238 f.
- ⑳ ヘリクレス戦略の基本的特徴および、ロネネン戦争中におけるこ

の戦略からの逸脱については、A. J. Holladay, "Athenian Strategy in the Archidamian War", *Historia* 27, 1978, 399-427.

- ㉑ この敵地は「船を乗りつけ、燬き築つ」(ἐπιπρυγίζειν) (Thuc. 1. 142, 4) ともなわれており、これは重要な戦術だが、これについては八八頁以下参照。
- ㉒ Cf. Ps. Xen. *Alth. Pol.* 1. 15, 16.
- ㉓ Insinsky, 14.
- ㉔ 村川堅太郎「民主政期に於けるアテナイの『古代史論集』」五二頁。
- ㉕ Ps. Xen. *Alth. Pol.* 2. 4, cf. 2. 5.
- ㉖ 四三一年から四二四年までの間、四二九年と四二七年を除いて毎年、このよう。
- ㉗ Thuc. 1. 108, 5; Aischin. 2. 75; Diod. 11. 84; Paus. 1. 27, 5.
- ㉘ アテナオスは、トルミデスの遠征の動機を、アテナオスに匹敵するような功業をたてるため、としているが、このような遠征目的の場合、通常軍事的に華はなし、戦果を挙げることだけが求められる。耕地破壊という手間がかかり、あまり名誉にもならない行動は馴染まないであろう。この時のヘリクレスの遠征については、アテナオスに軍事的行動以外に記しては、(Thuc. 1. 111, 2)。
- ㉙ アテナオスは、トルミデスがギネタイオンを占領し、その町と造船所を焼き、その土地を荒らした (Diod. 11. 84, 7) とし、アテナオスは、トルミデスがギネタイオンの土地を荒らし、さらに帰路多くの土地を荒らした (Paus. 1. 27, 5) としているが、トゥキディデスは、ただ「ラケダイモン人の造船所を焼き、コロントスの植民市カルキスを奪取し、ギネタイオンの土地に上陸して、戦闘でかれらを破った」(Thuc. 1. 108, 5) とのみ記し、耕地破壊については一言のべつた。アテナオスとアウサニアスの記事も土地を荒らした場所がた

がいに違っており、信じ難いところがある。ここは第一次史料であるトゥキヂヂテスを用いし、耕地破壊の記事は後世の挿入とするのが妥当と思われ。

⑩ 敵国の耕地破壊の方針については、Thuc. I, 143, 4. の実言にて「*καὶ τὰς ἐπιπέδων ἀγρῶν ἀποκαταστάσειν*」Thuc. 2, 25, 3, 2, 31, 3, 2, 56, 4-6.

⑪ 本論文八八頁以下参照。

⑫ *οὐδὲν ἄλλο ἐκ τῶν ἀποκαταστάσεων ἐστὶν ἢ τὸ ἀποκαταστήσειν τὴν ἀγρῶν ἀποκαταστάσειν* (実際は民衆の側に立っているのに「生まれからみると、民衆派ではない」という文でいわれている者がメリクレスであると解する論者は少なくなく、とくにインスティンスキーはそれを明言し、成立年代推定の決定要素の一つとしているので (Instinsky, 35, 37) これについて考へてみる必要がある。インスティンスキーと同意見は Frisch, 285. 以下 *Hr. Schmidt* (cf. Kirchoff 1878, 21).

(四) 四二五—四四年説の根拠

四二五年半ばから四二四年半ばまでという説は、キルヒホフが一八七八年にそれを明確に主張して以来、一九三二年にインスティンスキーの早期説が現われるまで支配的で、フランスでもグロッツをはじめ大部分の学者がそれに従っていた。^⑬ もっとも多くの学者はキルヒホフ説にそのまま従うよりも、その近くに類似あるいは別種の理由を設けて年代を推定していた。やがて重点は早期説に移り、キルヒホフ説は後退したが、しかしその後でもメリット、フォレスト、ムーアがキルヒホフと同時期を主張し、さらにトロイもこれに傾いている。^⑭ これら有力な学者の賛同は無視できないが、しかし年代を根拠づける事実新しいものはほとんど加えられず、理由づけも格別に補強されたようには思えない。もともとキルヒホフ説したい年代推定の根拠となる記述をほとんど指摘したにとどまり、その理由の説明はけっして充分ではなかったが、その後半世紀以上かれの説がさして深められることなく受容され、やがて早期説の批判を通過したあとも、この状況には

Gutschmid (cf. Gelzer, 88). *καὶ τὸ ἀποκαταστήσειν τὴν ἀγρῶν ἀποκαταστάσειν* は複数的の「*リクレス以外にソノキクレス (Hohl op. cit., 32) あるいはソノキクレス (Forrest, 113) あるいは一人とわれ あるいはリクレスに限らば (G. Busolt, Griechische Geschichte, Gotha 1895, III², 611) あるいは あるいはリクレスは「民衆派の指導者」(Miller-Strubing, 65) あるいは (H. Diller, Review of Gelzer, Gnomon 15, 1939, 118) あるいは説 あるいは *καὶ τὸ ἀποκαταστήσειν τὴν ἀγρῶν ἀποκαταστάσειν* 7 どの文章上の類似はあって、メリクレスという推定を有利にするとしても、これははるかに後代の記事であり、またわれわれに知られていない貴族出の民衆派 (「民衆派の指導者」とはいつていない) は少なくなかったと思われるので、メリクレスと特定する根拠は充分でないといわざるをえない。また上に引いた文で *τὴν ἀγρῶν* の解釈については説が分かれているが、これについては cf. Frisch, 285 f.*

とんど変化はない。この間インスタンスキー以後盛んになった早期説、あるいは後期説、さらに文体や思想からする年代推定等諸説が提示されてきたが、これらの多くは全体を度外視して記述の一部あるいは一面を強調し、いたずらに新奇を追ってきた嫌いがある。結局さまざまな根拠にたつ諸説を検討した結果、キルヒホフらの古典説が真面目な検討に値するものとして、ふたたび浮かび上ってきても不思議はないであろう。ところで再度古典説を採り上げる場合、もっとも必要とされるものは周到な根拠づけである。

つきにそれを試みてみよう。

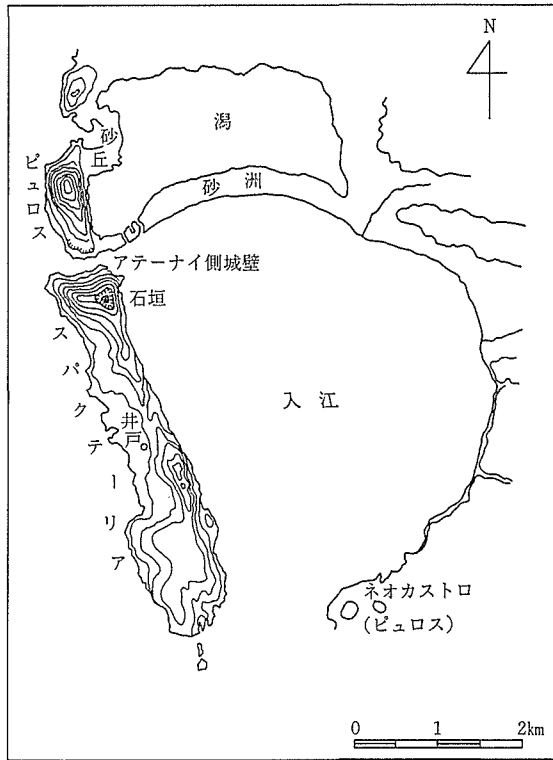
一、まず「どの大陸にもあるいは突出した岬、あるいは沖合いの島、あるいはなにか狭隘な場所があるものだ。そのため海の支配者はこれらの場所に船を着けて、陸地の住人たちを苦しめることができる」(2・13)という記述の解釈である。この記述はたんなる理論ではなく、事実的経験に基づくものであると思われる。ここに挙げられた諸攻撃地点のうち、沖合いの島は四三一年のアタランテ島、四二七年のミノア島、四二四年のキュテラ島のそれぞれ占領、また狭隘な場所、とくに海峡は四三〇年のナウパクトゥスを基地とするクリーサ湾周辺の封鎖という歴史的事実と結びつくと考えられている^④。このうちアタランテ島の占領の場合はロクリス人の海賊を防ぐのがおもな目的で、ロクリス人の領土を攻撃するためのものではないから除いた方がよいかもされないが、他は記述内容に照応するとみてよい。このうち、キュテラ島を基地とするスパルタ本土攻撃の勧めはヘロドトス(7・235)にも記されており、しかもヘロドトスが四二四年の事実を知ってこれを記した可能性は少ないので、この戦略はそれが実行される前から識者の考慮のうちにはあったとみられる。島から本土を襲うという攻撃方法は海軍国アテナイに馴染みやすいし、海峡封鎖も同様である。したがって島と海峡についての記事はおそらくもクリーサ湾周辺を封鎖した四三〇年には書かれえた筈である。

これに対して「突出した岬」(ἀκρῆ πρὸς γούνα)については四二五年のピュロス攻撃までは該当する事実が伝えられていない。岬の基地化はこのときはじめておこなわれた作戦であると思われる。ところで「船を着ける」(ἐπιπλοῖον)という語

を、そこに上陸し、占領し、「砦を築く」(ἐρείτικον)と云う戦略(Thuc. 1. 142. 4)の意味に解してよいのかが問題になる。ἐργασίανには封鎖するという意義もあり、これは海峡封鎖の場合にはそのままではまる。ところでこの小冊子の著者は事を細かく具体的に記さない傾向がある。たとえば2・4の παρακλιςは前後関係から「接岸して敵地に攻撃を加え」と訳することができるが、この語はもともと「沿岸航行する」という意義である。しかしこれに続いて「敵が来襲すれば、乗船して……」という文があることによって、航行の途中で上陸していたことが知られ、さらにこれに先行した記述「自分より強い国の領土を荒らすことができる」によって、上陸後敵の耕地を破壊していたことが知られる。一般に παρακλιςが通過を表わすにたいして、ἐργασίανは定着を示すので、かれの語法からすれば、そこに留って砦を築くという解釈は無理とはいえない。海上封鎖はナウパクトゥスを基地としていたし、島の場合はいずれも砦を築いている。したがって突出した岬に「船を着ける」がヒュロスにおけるように、占領と砦構築とを意味すると考えることは許されるであろう。

問題は開戦以来アテナイをもっとも有利な状況に立たせる発端をつくったこの斬新な戦略を知ることなく、作者がこの記事を書いたのかという点である。まず第一にこの記事は常識的にみて疑問をいだかせるような内容を含んでいる。沖合の島はしばしば入江をもっているが、それとは違って岬は一般に三段権船のような大型の船を着けるのに適当な場所とはいえない^⑥。突出した岬は当然波が荒いし、敵前上陸のため船の破損を覚悟で着岸するならまだしも、そこに碇泊するのは一般に難事であろう^⑦。またかりにそこに上陸して砦を築いたとしても、敵の優勢な陸軍が岬に押し寄せてくれば、上陸軍は容易にそこで塞ぎ止められて、かえって補給が大きな負担になる。海軍基地として重要なものは岬そのものよりも、その岬を占領することによって得られる港である。しかも数隻ではなく、少なくとも数十隻の三段権船が碇泊できる程度の港が必要で、もしそれがあれば碇泊も補給も出撃も可能である。しかし一般に良港が得られるのは入江であって、突出した岬と深い入江とは地形的に対照概念をなしている。しかも著者が船を着ける場所として「突出した岬」を第一に挙げ

ピュロス, スパクテリア



トゥーキュディデース『戦史』久保正彰訳 岩波書店 中巻137頁より

ピュロスの南にスパクテリア島が南北に長く横たわっていて、その東側の陸地との間につくられたナヴァリノ湾を外海から覆う形になっている。ピュロスの南端とスパクテリア島の北端との間のシキア海峡は約一五〇—一八〇メートル、スパクテリア島の南端と陸地との間は一、二〇〇メートル以上ある。ピュロスの東側は一三〇—一四〇メートルの絶壁だが、その北部からは登ることができる。西側では北部は険しいが南部は緩くなり、ブラシダスらはこの西南部に船で上陸を試みた^④とされている。

アテナイ艦隊ははじめ嵐を避けるためにこの港に入ったといわれている (Thuc. 4. 3. 1)。このトゥキュディデスによ

ているということは、ピュロスの事件を周知のこととして前提していない限り、理解しがたいのではあるまいか。ピュロスの地勢とピュロス事件の実際の経過とは上記の考慮を確認するように思われる。

ピュロスには岬だが海岸線と垂直方向にはなく水平方向に延びているので、格別に風波を強くうけるわけではないが、海岸(西側)には碇泊できる場所はなく、着岸も容易ではない^⑤。その裏側(東側)は湾に面しており、その北端の砂丘、南端の砂洲が陸地に続いている。

って「港」(harbour)とされているところがナヴァリノ湾なのか、それともその奥にある今では潟となっているところなのか問題である。なぜなら当時はまだ砂の堆積が少なく、潟は海とつながっていた可能性が大きい^⑩。もしもそうだとすると、平面図だけみればまさにピュロスが背後に良港をもっていたことになるが、実はその部分は絶壁なので、ピュロス沿岸には砂地の小部分を除いて碇泊できるところはない^⑪。結局ピュロスを占領したアテナイ軍はスパルタ軍によって海陸から攻撃をうけ、苦しい守備を強いられることになった。やがてアテナイ艦隊の来援を得て制海権が完全にアテナイ側に確保されたあとでも、陸地とスパクテリア島とは依然スパルタ軍に抑えられていたので、艦隊は投錨地もえられず、上陸軍は飲料水と食料に不足して籠城にひとしい状態に陥った(Thuc. 4. 26, 29. 2)。スパクテリア島を奪取したあとはその南東部に碇泊地を得て、状況がかなり好転したが、このような戦闘経過は岬に砦を築いて基地化しただけでは無意味、というよりも負担になるだけで、それと同時に港が得られなければ、上陸軍はいずれ撤退か降伏を余儀なくされることを示している。つまり「突出した岬」はそれとともに利用できる港があることを前提としているのであり、またこの前提は1・13の記述がピュロス事件の経過に依存していたことを意味している。

第二にピュロス作戦の新奇さである。すでにみたようにキュテラ島占領については、それが実現される前からその作戦の有効性が識者の間に知られていたと思われるが、ピュロス作戦はデモステネスの独創であった。この作戦に取掛る前にかれがクレオンに計画を打ち明けていた可能性は、史料的には立証されないが、斥けきることもできない^⑫。ともかくこの作戦は実現直前までデモステネス一人、あるいはせいぜいクレオンと二人の胸に秘められており、他の誰もこのような作戦を予想も計画もしていなかったことは確実である。艦隊を指揮していたエウリュメドンとソフォクレスもピュロスに砦を築くというデモステネスの計画に反対であったし、兵隊長たちも、またかれらを通して計画を知らされた兵士たちもそれに賛成しなかった。その際デモステネスはピュロスの特殊性を強調し、それが港に接していること、旧メッセニア領なのでメッセニア人を用いることによって戦果をあげられることなど縷々説明したにもかかわらず、他の両指揮官がピュロ

ス作戦をペロポネソス沿岸の他の無人岬の占領と同一視して、戦費の空費しかもたらさないとしていることは (Thuc. 4. 99) 、この作戦が新奇なもので、歴戦の指揮官たちにすら受容されなかったことを示している。ともかく現場に立ってデモステネスの説明を聞いても、誰もこの作戦の有効性をただちには理解できなかったのである。それなのにどうしてこの作品の著者がピュロス作戦の実施以前に岬を基地化する戦略の有効性を知りえたであろうか。かりにかれが海軍の戦略に通じていた人であったとしても、それはまず望めなかったであろうし、万一かれが天才の戦略家であってその有効性に気づいていたとしても、一般には意外と思われるであろうこの作戦については、さらに何らかの説明的語句を加えた筈である。まったく自明のことのように、それしたい舌足らずで不用意な「突出した岬」を第一において、そこに「船を着ける」という書き方はできなかったであろう。

第三にペリクレス戦略との関係である。ペリクレスは開戦のための演説のなかで「敵地に船を乗りつけ、へ砦を築く」(Strategikēn) (Thuc. 1. 142. 4) とのべている。これがピュロスのあとメタナ、キュテラと続く砦構築作戦を予見したものであるかについては、学者の間で論じられているが、否定的見解が支配的であると思える。それは戦争中における領地非拡大というペリクレス自身の基本的方針に反するし、かれの戦法の実際とも適合しない。ハラディはペリクレス戦略から明らかに外れるものとして、四二七年にはじまるシチリア作戦、デモステネスによるアイトリア作戦とピュロス作戦の三つを挙げている。ともかくピュロス作戦以後メタナ、キュテラと敵地に砦を築いて基地化する拠点作戦が続くことになり、これはスパルタによるデケレイアの要塞化によっても模倣されることになったが、これら一連の作戦の創始者はデモステネスである。かれは従来ギリシア・ポリスの主要な戦闘形式であった重装歩兵の密集陣による戦いに対して、根本的に新しい戦法を編み出した。トロイはデモステネスをペロポネソス戦争におけるもっとも進歩的な戦略家としている。このようにデモステネス戦略はペリクレス戦略の延長線上にあるものではなく、二つの戦略の間には一種の断絶があるとするならば、四三一—三〇年と四二五—四年とは戦略的見地からも区分される特徴をもつことになろう。もちろん四二五年以後

も船を用いて敵地を荒らすというペリクレス戦法が捨てられたわけではないが、戦略の重点は移行したのである。この重点の移動がデモステネスの画期的な獨創性によるものであるとするならば、どうしてその実施以前にこの作品の著者が2・13の記事を書くことができたであろうか。

二、四二五―四年説の理由づけとして、2・18も注目される。この「喜劇禁止」の節については十九世紀以来これまで学者の間で大いに論議されてきており、すでに論じ尽された感すらある。しかも近年の研究はおおむねこの節によって成立年代を判断することはできないという方向に傾いている。したがってここで言及もその一つの面について注意を喚起して年代推定の参考とする、ということにとどまる。まず論述の順序としてこれについて今世紀に入って現われた二つの主張を紹介しておきたい。カリンカはこの節を成立年代推定の決め手としている。かれは喜劇による嘲笑などを「許さない」(ὀκείων)をインスティンスキーと同じく、国家的禁令の意味に解して、それをアリストファネスの『バビロニア人』が上演された四二六年から『騎士』が上演された四二四年一月までの間に成立し、通用していた法とする。『騎士』ではデ―モスはひどい目に会っているにもかかわらず作者らは罰せられなかったので、このときまでには法は廢されていたと考えるのである。またインスティンスキーは、この禁令はモリュキデスの決議を指すとし、この法が通用していた四四〇／三九一―四三七／六年をこの作品成立の上限とする。しかしこの法のことを記した古注家は、それが四四〇／三九九年から三年間続いたと明言しているの^⑦で、インスティンスキーのように作品成立時に禁令が有効であったと解すれば、この間に上限のみではなく下限も含まねばおかしいことになろう。このように説が分かれているので、まず基本的にテキストと事実を確認することから始めよう。

まず禁令の内容について、2・18は「かれらは悪い評判を立てられたくないの^⑧で、民衆を喜劇で嘲笑したり、その悪口をいったりすることを許さない」(καυμώδῃ ῥητῇ καὶ κωμῶδες λέγειν τὸν μῦθον οὐκ ἔαται, ἕνα μὴ ἀπὸ τοῦ ἀκούουσι κωμῶδες)と記している。これに対してモリュキデスの決議は「喜劇上演禁止に関する決議」(τὸ φηγομα τὸ τερεῖ τὸ μὴ καυμώδῃ) 四二七

年に成立していたとされるアンティモスの決議は「個人名を挙げて喜劇で嘲笑してはならない」(ἡ δὲ βεβαίως καὶ μὴ ἔσται ὀνόματι) (Antiph. Ach. 503) また四一四年には成立していたとされるシュラコシオスの法は「いまより後個人名を挙げて喜劇で嘲笑することとは許されない」(ἡγεῖται ἔσται καὶ μὴ ἔσται ὀνόματι) である。³⁹ これで見ると、モリキデスの決議は喜劇の上演じたいを禁じており、他の二法令は個人名を挙げて嘲笑することを禁止している。これらは上演された喜劇のなかでデーモスを嘲笑したり、その悪口をいったりすることを許さないとしている。2・18の禁止内容とは明らかに違っている。

これに対して『パピロニア人』の上演の結果アリストファネスがうけた非難と制約は2・18の記述と内容的に酷似している。アリストファネス自身が「外国人のいるところでポリスの悪口をいふ」(ἐν αὐτῶν κατὰ τοὺς ἄλλους κατὰ τὴν πόλιν) (Antiph. Ach. 503) ἢ「われわれのポリスを喜劇で嘲笑したり、デーモスを辱しめたりすること」(ὅς καὶ μὴ ἔσται ἔσται ὀνόματι καὶ τὸν θεῖον καὶ τοὺς ἀνθρώπους) (ibid., 631. 傍点はずれも引用者) は許されないとされており、この場合ポリスとデーモスはほぼ等置されているので、これは結局「ポリスを喜劇で嘲笑したり、その悪口をいったりすること」の禁止を意味する。つまりここで2・18の記述と事実上同一のことがいわれていることになる。この作品の著者はおそらく『パピロニア人』に関わる事件を知っていたと思われる。四二五年に『アカルナイの人びと』が上演されたとき、観客の一人であった可能性も否定できない。ともかく2・18でいわれている喜劇についての禁止事項は四二六年における『パピロニア人』上演後喜劇作家に課せられたもののみ一致する。⁴⁰

この問題についてはこれ以上の論及は避けるが、このような禁止事項はカリンカが考えたように、あらためて法令として規定されたものではなく、おそらくクレオンがエイサンゲリア提起者となり、その告発に基づいておこなわれた評議会の審理の過程において、この喜劇上演が弾劾対象の罪状に当るかどうかがきびしく追求され、そこでアリストファネスは危うく難を免れたものの、嘲笑にたいする一定の枠の存在が明らかにされたものと思われる。⁴¹ なお2・18では喜劇の槍玉に挙げてよい者が明示されており、それは、(a) 富裕者、貴族、有力者。また細民や民衆派のなかでは、(b) でしゃばり、

(c) 出世欲のある者、である。クレオンもこれらのどれかに、あるいは複数に該当する者として、その後も嘲笑されたものと思われる。^③

三、「四〇〇人の三段權船奉仕者が毎年任命される」（3・4）という記事は、四〇〇人という具体的数字を示している点で注目される。ペロポネソス戦争末期までは共同で艦装義務を負担する制度はなかったため、四〇〇人という数字はそのまま四〇〇隻の三段權船の存在を意味することになる。しかしこの隻数はペリクレスが開戦当初の演説で挙げたとされる「航行可能な三〇〇隻の三段權船」というトゥキュディデスの記事と一致しない。^④

開戦から四二四年までの間では、四二八年に二五〇隻の三段權船が就航したのが最大数とされている。しかし大艦隊を動かすには乗組員の確保と費用とが問題なので、就航数と保有数とは別に考えるべきである。この二五〇隻のなかに、別置の一〇〇隻が含まれていたか否か、またどれだけ含まれていたかは容易に推定できない。ともかくこのときしたように二五〇隻を就航させるためには重装歩兵まで漕手に使う必要があったろう。しかし保有数としては大シチリア遠征における敗北まで、少なくとも当面の問題である四二四年まで、三〇〇隻を下廻ったということは考えにくい。三段權船は縦材を用いるので腐りやすかったため、海戦による損傷がなくてもつねに補充の必要があったが、航行のための乗組員への日当支出と比較して、建造にはそれほど多額の費用を要したとは思えない。^⑤ 三〇〇隻を下廻らず、多少ともそれを上廻る船数の保持は当然求められたであろう。アテナイは四八〇年当時における二〇〇隻から四三一年における三〇〇隻へと船数をふやしてきた。ペロポネソス戦争中においても、艦船こそ最大の戦力としているアテナイが、疫病に見舞われたとしても、海戦で大損害を蒙らない限り、保有数を減らしたとは考えにくい。

トゥキュディデスは海戦等による船の損害を明記しているが、四三一年から四二八年夏までの間にアテナイは一二隻以下を喪失あるいは大破されているが、敵船二八隻（内一隻はポセイドン神に奉納）を捕獲している。^⑥ また四二八年における二五〇隻就航から四二四年秋までに、アテナイは津波で一隻（Thuc. 3. 89. 4）、シチリアにおける海戦で二隻（Thuc. 4. 25、

ただしアテナイ側の船だがアテナイ船かどうかは不明)、黒海沿岸の豪雨で一〇隻を失った(Thuc. 4. 75. 2)が、他方ピュロス周辺で敵船五隻を捕獲(Thuc. 4. 14. 1)、休戦で六〇隻を引渡されている(Thuc. 4. 16. 3)。このような消耗数の少なざからみて、アテナイは老朽船を廃してその分を建造しさえすれば、ほとんど開戦当時の船数を維持できたことになり、これは少しも難しいことではなかったと思われる。またここで注目されるのは四二五年にスパルタ側から獲得した六五隻である。これまでこれに言及した研究を知らないが、これをアテナイがそのまま廃棄してしまったとは考えにくい。現に使用されていた船であり、改造を施したあとでも軍船あるいは兵員運搬船として用いたのではあるまいか。その時までの海戦その他における損害の軽微さからみて、当時三〇〇隻を一割程度超えて保有していたことは十分に考えられるので、それにこの予想外の捕獲品を加えれば、四二五―四四年における四〇〇隻という数字は可能性のないものではない。

以上のように四二五―四四年、さらにはその後しばらくの間は四〇〇隻程度を保有し、それに応じたトリエーラルコスがいたと考えることができるが、もともと六五隻は臨時的なもので、その後はまた保有数が減少したであろう。

四、「ところが現状では、アテナイ人のうち農民と金持は〈敵の意を迎える傾きがある〉(ἐπὶ τῶν ἀγροτέρων τοῖς κολήσιον ἰκάνω)。他方民衆はかれら自身の持物をなにも焼かれぬし荒らされぬであろうことをよく知っているので、恐れをいだくことなく暮らして敵の意を迎えることもない」(2・14)。この ἐπὶ τῶν ἀγροτέρων は何を意味するのか。これについての語義的解釈は種々おこなわれているが、敵のいいなりになる、敵の意を迎えるという解釈が多く、またこれが当たっているように思われる。しかしこれがアルキダモス戦争中敵の侵入によって「焼かれ」たり、「荒らされ」たりしている状態における農民と金持の態度であるとすれば、容易には了解されない。土地を荒らされた農民たちのスパルタに対する憎しみと戦闘的態度は少なくとも開戦当初から四二五年まで変らなかつたようである。また四二四年ごろではまだ騎士等の上層階級は民主主義に対して敵対的ではなかつたし、古い貴族の理想は生きていたとされるので、敵を引き入れたり、戦闘を手控えたりする態度をとる可能性は少なかつたであろう。とすれば、これは戦争にたいする態度ではなく、平和にたいする態度を指し

ているのではあるまいか。開戦から四二四年までの間に平和への動きがみられたのは、四三〇年疫病の苦境のなかにあつたアテナイからスパルタへの使節の派遣（Thuc. 2. 59. 2）、四二五年アテナイのビュロス占領と海戦勝利後におけるスパルタからの和議申入れ（Thuc. 4. 15 E）、同年アテナイによるスパクテリア島占領後におけるスパルタからの数次にわたる和平使節派遣（Thuc. 4. 41. 4）である。四三〇年の場合はアテナイ人は「ラケダイモン人にたいしてへしきりに和を結ぼうとした」（ἀπαμυρο εὐρυωπέων）（Thuc. 2. 59. 2）といわれており、εὐρυωπέωνは「讓歩する」という意義を含むので、εὐεργουρατ に近い。しかしこのとき戦争に苦しみ、ペリクレスを恨んだのは農民と富裕者だけではなく、民衆も含めた「すべての者」（οἱ εὐμυρατες）（Thuc. 2. 65. 3）なので、このときの状況は2・14の記述には当たらないと思われる。

これにたいして四二五年の場合にはスパルタの和議申入れを潰したクレオンのやり方はいかにも強引であり（Thuc. 4. 21. 22）、これは反対勢力の存在を感じさせる。まずニキアスはクレオンの死後いっそう強く和平を主張したが、以前からそれを望んでいたことは間違いない。かれは、民衆派の指導者であつたクレオンに対して「（著名な人びと）（τῶν ἐργαίων）を率いて」いた。クレオンがビュロス方面の指揮官を引受けることになつたとき、これでクレオンは失脚するか、それともスパルタを敗るか、いずれにしてもよい結果を得られると喜んだのは、「人びとのなかで（心ある人たち）（τοῖς σώφροσι）」（Thuc. 4. 28. 5）であつた。この人たちはクレオンに反対し、ニキアスに与する人びとであつたろう。しかもかれらは上層市民からのみではなく、農民からもなつていたに違いない。これらの和平を望む勢力は四二五—四年ごろにおいても小さなものではなかつたと思われるが、とはいへ、農民と富裕者が一団となつてそれを求めていたともいえない。ただ民衆と違つて、かれらの間では和平への傾きを示している人びとが多かつたということであり、ここは *πάλαιον* を重視すべきであろう。そういう和平への傾向の問題としてならば、先に引いた2・14の記述は四二五年以後の状況にあてはまるように思われる。

五、民会における発言の状況も四三一—三〇年か四二五—四年かを決めようとするとき、考慮すべきものの一つである

う。民会や評議会においてイセーゴリアが認められていたということは1・6と1・9に明記されているが、イセーゴリアの状況にも時代的な相違がある。「卑賤の者が誰でも望めば立ち上って発言し」(1・6)、「この手の者が自分のため、民衆のために役立つことを見分け」(1・7)ることができて、事実それを手に入れ、したがって民衆は、「この男は無知で賤しいが」(1・7)、自分たちに利益になることを承知しているという状態は、ペリクレスの生時よりもクレオン等の民衆的デマゴークが活躍していた時代の像に近い^③。ペリクレスの指導下ではイセーゴリアがこれほどあからさまに階層的利益に奉仕することは抑えられ、もつと国家的利益の追求に用いられていたように思われる。シェーフアーはペリクレスの下で民会における提案権の自由があったことを認めつつも、ペリクレスの巨大な力からみて、ペロポネソス戦争の開始までは市民の誰でもが民会で任意に提案できたとは思えないとし、アテナイ民主主義はかれの死まで貴族的性格を保持していたとのべている^④。これに對して、『国制』の著者のいう卑賤の弁論家は民衆に効用を認められ、その支持を得ていたことが知られるので、おそらくそれに応じた勢力をもっていたに違いない^⑤。ペリクレスの下では「この手の者」はたとえ発言しても、それほど多くの共感を得られなかったであろう。1・9の「気の触れた連中」はまずクレオンを想起させるといわれているが、^⑥1・6と1・7でいわれている者についてもクレオンか、かれに似た民衆的デマゴークたちを指しているところによってよからう。

① Leduc, 32.

② ATL, 1, 3, 67 n. 1; Forrest 115, cf. 108, 112; Moore, 20.

③ Treu, *op. cit.* (Eine Art von Choregie in peleistrischer Zeit), 391 Anm. 2.

④ ノタランテ島については Thuc. 2, 32, ミノト島については Thuc. 3, 51. キキラ島については Thuc. 4, 53-57. クリーサ湾については Thuc. 2, 69. 1. 本文に引いた 2・13 の記述がこれらの歴史的事実を指している見解については cf. Kirchoff 1878, 12-4; Busolt, *op.*

cit., 610. それに對する異論としては cf. Instinsky, 81; Gelzer, 72. なおノキストは岬についてはドロストとす^⑦が、島と海峡とについては独特の考察をしよう (Forrest, 112).

⑤ クロトスの記述のほか、パウサニヤスはトルミキスがキキラ島を占領したとしている (Paus. 1, 27, 5)。インスタンスキーはこの記事を自説の根拠づけに利用している (Instinsky, 9) が、トウキディデスとディオドロスとに記されていず、この記事は信用しがたい。前節注^⑧参照。

⑧ 防衛庁防衛研究所の海戦史研究担当官や旧海軍上級将校から聞いたところでは、岬に上陸するのは一般に、(1)そこを確保して海上の航行を統制するため、(2)上陸地点として左右の見通しがよいため(おもに小型船による場合)、(3)見通しよく、包囲もされないの、退却地点として確保するため、などの場合であるといわれる。もっとも岬に敵を攻撃するため上陸しようとする場合は別で、それはフランシスなどの率いるスパルタ側艦隊がピュロスにまわって試みてくる(Thuc. 4. 11-12)。なおかくピュロスとクテロスの上陸とその占領は、岬の確保そのものを主目的とするこれらの作戦のいずれにも該当しない。

⑨ Thuc. 4. 13. 3, 26. 3.

⑩ ユトロスの地形に「ユビバ」G. B. Grundy, "An Investigation of the Topography of the Region of Spakteria and Pylos", *JHS* 16, 1896, 1-53; R. M. Burrows, "Pylos and Spakteria", *JHS* 16, 1896, 55-76; do, "Pylos and Spakteria", *JHS* 18, 1898, 147-59; Gomme, *HCT* III, 482-6.

⑪ Burrows, *op. cit.* (1896), 63f.

⑫ Burrows, *op. cit.* (1898), 148. Cf. Thuc. 4. 11.

⑬ トマキトメオスはなぜかく現地を訪れていないのか、かれの地形についての記述には誤りが指摘されうる(Gomme, *HCT* III, 482ff.)。と「ユビバ」岬のとき避難した港だが、それは今日の地形ではナツマリノ湾とみられる。しかしこの湾は水深がふかく、かつ波が高い。はたして風を避けられる港であったかどうか疑問である(Burrows, *op. cit.* (1896), 68)。今日湾にならぬところならば避けやすかったであろう。湾が当時海につながっていた可能性は考えられる。それはトウキエティデスも、またそこを訪れたパウサニアスも湾について「言及してはなぬ」(Grundy, *op. cit.*, 6)「砂の堆積は時とと

に進んだという地理学者の証言があること(Burrows, *op. cit.* (1896), 26)のほか、トウキエティデスの記述からも推測される。アテナイ海軍の来援にたいして、スパルタ軍は湾口封鎖を考えた。そのときスパクテリアとピュロスとの間(シキア海峡)は二隻、スパクテリアと大陸との間は八、九隻で封鎖できる(Thuc. 4. 8. 6)としているが、シキア海峡の封鎖は二隻では不可能であり、グランディは四隻とみてくる(Grundy, *op. cit.*, Map showing conjectural positions in defence and blockade of Koryphasion)。しかし古典期の三段樞船の幅は約五、五メートルなので、封鎖には少なくとも一〇―一五隻を必要とするのではあるまいか(「J・ルーシェ『古代の船と航海』酒井傳六訳、法政大学出版局、一九八二年、九六頁以下参照)。ましてスパクテリア島の南と大陸との間は「二〇メートル以上あり、八、九隻ではとても封鎖できない。グランディはこの八、九隻で封鎖できる広きの海峡を「ピュロス島南東部の砂洲がまた部分的にしか形成されていないとき、それまでにできた砂洲とピュロスとの間の海の部分とみている。また現在の湾が海であったと思わせる記事として「ピュロスが「港に接してはなぬ」(Καίεως ποσότητος, Thuc. 4. 3.)「ユトロスの「港に面する港」(ἐν κερὰ τῷ Καίεως ἑστῶς, Thuc. 4. 13.)とどう表現がある。なお次注参照。

⑭ ピュロス南東端。しかしそこには何十隻と云う三段樞船を泊めることはできない(Gomme, *HCT* III, 485)。ユビバ岬のピュロス上陸軍のスパルタ軍に対する防衛線は今日も北部に一部残っているが、島全体にわたってはない(Burrows, *op. cit.* (1896), 64f.)。南部と北部の砂洲の部分は防衛線の外側にある(*ibid.*, 57, Map of Rough Plan)ので、この防衛線を守っていたとすれば「アテナイの艦船が碇泊できる場所はピュロスにはまったくなかったことになる。その場合問題はアテナイ海軍が来援するまでピュロスに残されていた三段樞船三隻につ

いづれ、トウキョウディエスが船を「引き上げて」防塞にたつてく(Gravē to *tekyōku*) 前方を塞ぐた(Thuc. 4. 9. 1)と記してゐる点で、引き上げた場所がどこかは記されてゐないが、ゴムンムは東南端とみてゐる(Gomme, *HCT* III, 444)。ここがシラウなるところの不可解になる。この *tekyōku* は防衛線の塔ではなく、この文からみても、またその防衛線が險峻な高所にある点からみても、船を引き上げたところに設けられた防柵といふことになるかもしれない。とすれば、ヌムルタ軍が来攻したとき、この三隻は当然捕獲されたことになり、明白に捕獲される筈のところ引き上げて柵をつくたのは奇妙に思える。事実とすれば、それはアテナイ軍の判断の甘さを示すが、あるいは砂洲まで本格的に守つてゐたかといふことになるが、砂洲の確保はそこに海が介在してゐなければ、到底不可能であつたらう。海が介在してゐれば高所の防衛線のみでなく、海岸にも、先の三隻をまよこに入れるような形で防衛線が設けられた可能性がある。これは戦闘の状況を推定する上で無視すべきな要因と思われる。

① Burrows, *op. cit.* (1896), 68.

② コミテイヤ両者の打合せがあつたと推測してゐる(Holladay, *op. cit.*, 424 ff. esp. 426)。ローンは否定的(M. Tren, "Der Strategie Demosthenes", *Historia* 5, 1956, 430)。トントフ同様(Gomme, *HCT* III, 471) など、トニーは肯定的(Ed. Meyer, *Forschungen* II, 1899, 340)。二人の接觸の可能性を推測する根拠となつてゐる記事は Thuc. 4. 29. 1-2, 4. 2. 4 によつてゐる。

③ Tren, *op. cit.*, 439 ff.; D. Kagan, *The Archidamian War* London and Ithaca 1974, 72 f.; Holladay, *op. cit.*, 400 ff.; De Ste. Croix, *The Origins of the Peloponnesian War*, London and Ithaca 1972, 209.

④ Kagan, *op. cit.*, 73 ff.

① Holladay, *op. cit.*, 408 ff.

② メタナはピロロスと地理的狀況がかなり違つており、岬のなかに船を碇泊できる場所もあつたと思われる。しかし著者は 2・13 の「突出した岬」として、まずピロロスを頭においたものと思われる。ピロロスの方が時間的に先であつたのみでなく、戦果の大ききはもちろん、作戦の重要性の点でもメタナをはるかに上廻つてゐた(Holladay, *op. cit.*, 408) によつてゐる。

③ Tren, *op. cit.*, 447.

④ Cf. Thuc. 4. 25. 8, 4. 45. 4, 130. 1, 5. 84. 2, 6. 105. 2.

⑤ 十九世紀にける諸研究、諸論議によつては、cf. Müller-Stöbing, 38-47; Kalinka 1913, 7-16.

⑥ Kirchhoff 1878, 18; Gelzer, 72; Tren, 1956; Frisch, 279 f.

⑦ Kalinka 1913, 7-16.

⑧ Instinsky 24.

⑨ Kalinka 1913, 12.

⑩ Instinsky 33 f.

⑪ Boeckh, *C.I.G.* 1, 229, quoted in M. Radin, "Freedom of Speech in Ancient Athens", *AJP* 48, 1927, 220.

⑫ インストヤンスキーは成立年代を四四〇—三三三年の間とする(Instinsky, 34)。

⑬ 後二者、とくにシュラロニコスの法は実在性あるいは実効性がきわめて少かつたといふべきである。Cf. Radin, *op. cit.*, 221.

⑭ 2・81 の記述を『ピロロブ人』に対する告発と関連づけてゐるのは、Kalinka 1913, 7 ff.; Stail, 58 ff. など、『アカルナイの人びと』については、村川堅太郎訳(ギリシア喜劇全集—人文書院刊)を参照した。

⑮ エイサンゲリアとして告発されたと推測される理由は、事件がまず

- 評議会において審理されていること(Aristoph. *Ach.* 379)。⁶⁷ こゝに訴因の点からみてエイサンゲリアが適當と思われることである。エイサンゲリアが通常の訴訟事件と違つてまず評議会を審理されることがある点については、橋場弦「古典期アテナイのエイサンゲリア(弾劾裁判)について」『史学雑誌』九六・七(一九八七年)、八一—二〇頁。同「古典期アテナイのエイサンゲリア(弾劾裁判)をめぐる諸問題」『法制史研究』37(一九八七年)、一一—一五六頁参照。また訴因の点からみると、「五世紀のエイサンゲリアでは、この手続は法および習慣によつて、さまざまな種類の荒蕪および(ディオオノイテスによれば)無神論を理由とする訴訟提起に用いられたし、また評議会と民会がその違反行為を重大なことに認めれば、法によって特定された以外の違反行為にも用いられることができた」と、カイキリオスよりもっと正確に、われわれは言うことができる」(D. M. MacDowell, *The Law in Classical Athens*, London 1987, 184) とつう言が参考になる。シュタイルはこの裁判事件をエイサンゲリアであると明言してゐる(Stall, 58 Anm. 162) があり、これを試訳しておく。「なぜならかれは抽籤および拳手によつて選ばれた官職者およびクレオンを、外国人の前で嘲笑した……そのためクレオンは激怒して、これらの所業はデームスとブルーレエに対する侮辱に當るとして市民に対する不正の廉で、かれを告発した。」
- ⁶⁸ 評議会から民衆法廷あるいは民会への事件の回付を免れたと思われろ。なお前注参照。
- ⁶⁹ この事件の経過については Aristoph. *Ach.* 377-82, *Vesp.* 1284-91. 嘲笑制限については Aristoph. *Ach.* 502-7, 515-6, 630-2.
- ⁷⁰ Gelzer, 89; Forrest, 112.
- ⁷¹ この制度は四一〇—四〇〇の間に導入されたことが知られている

(H. Strasburger, "Triarchie", *RE* VIIA1 108).

- ⁷² Thuc. 2, 13, 8. なお Xen. *an.* 7, 1, 27 を開戦時に三〇〇隻を下にせる数保有してゐたとしており、Diod. 12, 40, 4 の記事も同様と解される。また Aischin. 2, 175 はニキアスの平和の時期に三〇〇隻を下にせる数保有したとしてゐる。このトゥキキディデスとアイスキネスとの記述によつて、ペーランドは、「四〇〇隻以上の船」という *MSs* に *cf.* And. 3, 9 の記述を「三〇〇隻」に変更して (K. J. Maidment, *Minor Attic Orators* I, Loeb Classical Library 504 f.) また Aristoph. *Ach.* 545 で *cf.* 示してゐる三〇〇隻は保有数ではなく、就航可能数と解すべきである。なお、成立年を四三二年前とする説が四〇〇隻をどう説明するかについては、Instinsky 19; Frisch 311 f.
- ⁷³ この三五〇隻の内訳をトゥキキディデスは示してゐる(Thuc. 3, 17, 2) が、レスボス派遣の四〇隻十々(Thuc. 3, 3, 2, 18, 3) が含まれているか不明。これについて谷藤康「前五世紀におけるアテナイの海軍力」『学習院史学』26(一九八八年)、七〇—七二頁参照。
- ⁷⁴ 操船の実習のために毎年六〇隻の三段櫓船を八か月有給で就航させた(Plut. *Per.* 11, 4) ともいわれるが、このための費用は日当一人一ドラクマとすると、四八〇タラントンになる。これは開戦時におけるデモス同盟からの年賦金収入の八〇%に當る (cf. Gomme, *HCT* II, 42)。船を動かすには、いかに巨額の費用を要したか知られるであらう。cf. M. I. Finley, *Economy and Society in Ancient Greece*, London 1981, 49.
- ⁷⁵ Gomme, *ibid.*, II, 82.
- ⁷⁶ 藤縄謙三「自然の荒蕪の問題」『ギリシア文化の創造者たち——社史的考察——』所収、筑摩書房、一九八五年、二一九頁以下。フィレンレイは耐用年数を二〇年余りと推定してゐる。(cf. *ibid.*, 49)

(五) 四三一—三〇年説批判

これまでの記述でも折にふれて四三一—三〇年説に批判的に対決してきた。しかしここで、それに有利とみられている根拠として、著者が四三〇年と四二七年とに発生した疫病に言及していないという事実があることを無視するわけにはゆかない。疫病の襲来はペリクレス戦略による籠城作戦の重大な弱点を露呈させることになったわけだし、また2・6で作物の病気についてのべているのに、人間の病気に言及しないのは片手落ちだという見方もある。疫病の事実はこの作品がその発生以前に書かれたとする説の重要な論拠になっている。^①ところでわれわれには、アテナイにおける疫病の蔓延はアテナイが通商国家・海軍国であって、多くの外国人がそこに出入し、また多くの市民も広く海外に出ていったということにまず帰せられるであろう。したがってこれらの事実を記した以上、その結果ともいえる疫病についても経験していれば当然記したと考えがちである。しかし同様な因果関係の認識を当時の人びとが一般にもっていたとは限らない。ペイライエウスでまず病気が発生したとき、アテナイではペロポネソス人が貯水池に毒を入れたらしいという噂が広まったこと(Thuc. 2. 48. 2)、疫病が広まったとき「ドーリス人との戦さがくるとき、疫病も一緒についてくる」という予言が思いだされたことなどの事実がそれを示している。したがって著者が第二章でも海軍国と陸軍国とを対比しながらその得失を論じていたとき、疫病に言及しなければならぬ必然性があったとは断言できない。まして著者が優越的気分で陸軍国にたいする海軍国の諸利点を列挙しているとき、疫病の事実に触れることは全体の叙述を台なしにしてしまう。文脈上それに言及する場所はなかったというトロイの言は当っていると思われる。^②アテナイ人は戦争開始以来田園から市内への移住、生活環境の変化、一部貧者の上昇と富者の没落、ペロポネソス軍の侵入と農地破壊、疫病等々、急激で強烈な変化を相次いで経験している。疫病と敵の侵入とによって苦しめられた人びとはペリクレスに罰金を課したが、その後まもなくかれらはふたたびペリクレスを将軍に選んだ。その一つの理由としてトゥキュディデスは「かれらはそれぞれ個人的なこ

とについてはすでに苦痛にずっと鈍感になってい」(Thuc. 2. 65. 4)たと説明している。疫病は忘れられはしなかったが、もう過ぎ去った。いまや疫病による打撃をも克服して、勝利への道にあると思っているとき、あえて唐突に古傷を晒す必要を著者は認めなかったであろう。

① Gelzer, 68 f., 74; Hohl, *op. cit.*, 38 f.; Fritsch, 57; cf. Instinsky 35. また疫病の影響をとまかく顧慮するのは Gomme, 228; Diller, 117; Forrest, 111. なお真下「制作年代」三八頁参照。

② Thuc. 2. 54. 2. トゥーキユディデース『戦史』久保正彰訳、岩波書店、一九六六年、上巻二四二頁。
③ Treu, 1951 f.

結論的考察

さて、上限はビュロス作戦が軌道に乗った四二五年夏であるとすれば、下限はどこにおかれるであろうか。四二四年秋にブラシダスがテッサリア領を通過してアカントスに到った遠征は、ロシジャー以来下限として広い支持を得ている。^① 2・5は「陸の支配者は自国内から数多の日数を要する遠征に出掛けることはへできない」(ἐξ ὅτων)と明言しているが、ブラシダスは難渋したとはいえともかく目的地に到着したので、この事実と2・5の記述とは相容れない。とすれば、この記事がこの遠征前に書かれたという推論は正しいように思える。しかし四二六年末ごろコリントスはクセノクレイダス麾下の三〇〇の重装歩兵をアムプラキアに送っており、一行は苦心惨憺の末陸路目的地に到着した。^② コリントスからアムプラキアまでの行程は数百キロメートルあり、これは自国内から数多の日数を要する遠征に出掛けることに当るであろう。^③ とすれば、下限はここに移されるか、あるいはもっと妥当な解釈として、2・5の記述の「できない」は例外を無視して一般的事情を断定的にのべたものとみるべきかということになり、ブラシダスの遠征を下限とする説はゆらがざるをえない。ともかくこれは下限を決めるために一つの参考とはなるが、決定的論拠とはなりえないように思われる。

われわれは2・14、16の「現状では」(ἄρτι)を現在の現実と解してきた。この点を重視すると、ペロポネソス同盟軍の

アッティカ侵入は四二五年を最後に中止されているので、下限は四二五年夏になるのではないかという問題が生ずる。しかしこれはいっそう考えてみる必要がある。四二四年以後侵入が中止されたことはわれわれには周知のことだが、四二五年当時のアテナイ人にとってはどうであつたらうか。この中止は、もしペロポネソス同盟軍がアッティカに侵入すればスパルタリア島で捉えた捕虜を処刑するという、アテナイ人の決議の結果である。この決議はスパルタ人にとっては決定的意味をもつことになったが、一般のアテナイ人はこの決議によつてつぎの年からスパルタ側の侵入が止められると確信できたであろうか。開戦以来毎年侵寇されてきたことではあり、もう来ないという保証はなく、敵に襲われたとき田園にいて身柄や財産を抑えられれば大変な結果になる。翌年五、六月も過ぎてペロポネソス同盟軍は来寇しないということが事実で証明されるまでは、一般のアテナイ人、とくに著者にとつて「現状」は続いたものと思われる。

こうしてみると、下限は四二四年六月ごろとなり、キュテラ島攻略後にならう。したがつてこの作品の成立時期は四二五年八月から四二四年六月ごろまでの間、おそらく同年秋までの間とみるのがもっとも妥当のように思われる。

① たγυςεπάρ Kirchoff 1878, 14f.; Busolt, *op. cit.*, 611; Stail, 70; *Hohl, op. cit.*, 28; Treu, 1951. Cf. Kaimka 5f.

② Thuc. 3, 114, 4. ただしこの場合ホリントは「陸の支配者」(τῶν κερὰ γῆς ἀρχόντων) は当らない、という反論があるかもしれない。

しかし本文に引いた 2・5 の趣旨は陸軍の遠征不可能をいっているので、「陸の支配者」でなければ、いっそう困難が多ただけで、遠征をなしとげた事例として不適切とはいえない。

③ ブラシダスの遠征路はスパルタからアカントスまでであったが、コリントスまでは同盟国内であり、またマケドニアに入れば、同盟者ペルディッカースの支配地である。そこで事実上コリントスからディオーンまでとみれば、この間の距離はコリントスからアンブラキアまでの距離と質的に区別しなければならない程の大きな差があるとはいえない。

courses. The *Monjō* Course was to train candidates for the *Shūsai* and *Shinji* Tests.

In Chapter II, I assert that the *Monjō Tokugō* Student Test in the form of the *Shūsai* Test, and the Sub-*Monjō* Student Test, which selected *Monjō* Students through the *Shikibushō* (the personnel section in ancient Japan) Examination were established in 827, and that the establishment of the *Tokugō* Student Tests of the three other courses was in the same year. The reformation in 827 was enacted into the *Jōgan Shiki* Law.

The establishment of the *Monjō Tokugō* Student Test can be evaluated as one of the movements that elevated the status of *Monjō Hakase* (the professor of *Monjō* Course), and added a new aspect to the activities of the graduates of the *Monjō* Course in the political world that were already detected in the *Kōnin* and *Tentyō* years (810-834).

The Date of Composition of Pseudo-Xenophon's *Constitution of the Athenians*

by

NAKATEGAWA Yoshio

The date of composition of this work has been diversely discussed by many scholars since the middle of the last century. They seem to have already found all of the statements in the work that could be clues to the presumption of the date and we could find no new clues. Nevertheless, there is still no generally accepted opinion about the date. This can be attributed to the fact that while each scholar has identified his own clues, none has fully explained why his clues made it possible for him to presume the date. In view of this, it is most necessary to pro-

vide good and persuasive reasons for the carefully selected clues.

Some conditions that are indispensable to making a correct presumption will be presented first. Next, the opinion which argues that the work was written between 431 and 424 B.C., and which is supported by the majority of scholars, will be called the “middle period view”. Later period and earlier period views, which presume the date of composition to be later or earlier than the “middle period”, will be both refuted; then the view of the middle period will be shown to be correct. We make a distinction between the view of 431-430 B.C. and the view of 425-424 B.C. within the middle period, and try to prove the correctness of the latter on the basis of good reasoning while arguing against the former. Finally, the presumption of *terminus post quem* and *terminus ante quem* will be discussed as a conclusion.

The Failure of Romanus III Argyrus

by

NEZU Yukio

In 1025 after the death of Basil II, it seemed the Byzantine Empire was at zenith of its power. By then expansionist policy had reached its limit, and serious social changes resulting from the growth of the aristocracy, had occurred throughout the country.

In this paper, we examine the Byzantine Emperors in this transitional period through the behavior of Romanus III Argyrus, who occupied the throne at that time. In particular, focusing on imperial participation in the military campaign, we will demonstrate that the expedition was very important to the consolidation of his government. We examine how he came to the throne and who were the leading members of his